

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

平成 27 年 5 月 1 日	
所属部局・職	霊長類研究所・修士課程学生
氏名	西山 瑠衣

<b>1. 派遣国・場所</b> (〇〇国、〇〇地域)	
宮崎県串間市幸島	
<b>2. 研究課題名</b> (〇〇の調査、および〇〇での実験)	
幸島におけるニホンザルの同種間での攻撃行動についての事例研究	
<b>3. 派遣期間</b> (本邦出発から帰国まで)	
平成 27 年 4 月 25 日 ~ 平成 26 年 5 月 1 日 ( 6 日間)	
<b>4. 主な受入機関及び受入研究者</b> (〇〇大学〇〇研究所、〇〇博士/〇〇動物園、キュレーター、〇〇氏)	
半谷 吾郎京都大学幸島観察所	
<b>5. 所期の目的の遂行状況及び成果</b> (研究内容、調査等実施の状況とその成果：長さ自由)	
写真(必ず1枚以上挿入すること。広報資料のため公開可のもの)の説明は、個々の写真の直下に入れること。別途、英語の報告書を作成すること。これは簡約版で短くてけっこうです。	
<p>今回の実習では、ニホンザルの同種間での攻撃行動についての観察をおこなった。幸島を訪れた際、私はサルの同種間での攻撃行動が、頻発する時間帯と静まる時間帯が数分間隔で繰り返し現れているという印象を受けた。ここから私は、前に起きた攻撃が次の攻撃を誘発しているのではないかと仮説を立てた。ニホンザルでは、ある個体が別の個体を攻撃した際、攻撃された個体がそれ以上攻撃を受けまいと、更に他の個体を攻撃する転嫁攻撃という行動が知られている。幸島のサルはそれのバリエーションとして、ある個体が攻撃を受けた際、別の個体が自分の身に起こるかもしれない攻撃を察知し、攻撃される前に転嫁攻撃様の行動をするのではないかと考えたのである。しかし一方で、ある個体が別の個体を攻撃する頻度が一定であると仮定すると、攻撃の起こる頻度は単純にサルの個体数に依存しているという可能性も否定できない。</p> <p>そこで本観察では、幸島におけるニホンザルの餌付け個体群を用いて、餌付けが始まる直前である 10:30 から、餌付け終了後おおよそ 1 時間の 12:00 まで、台形に区切られた調査区内(図 1)で攻撃行動が起こった時間を秒単位で逐一記録した。また、調査開始から終了までの調査区の様子をビデオカメラで記録した。分析として、もし、ある個体が別の個体を攻撃するタイミングが一定であり、攻撃がランダムに起こるのであれば、調査区内における個体数に比例して、攻撃回数は増える筈である。それを確かめるため、一分ごとに前の攻撃の 40 秒以内に発生した攻撃があったか否かと、一分間ごとの調査区内の個体数を調べた。そして攻撃がランダムに起こった場合を仮定したシミュレーションを行い、シミュレーションの結果と観察結果の比較を行った。結果的に、両者に有意差は見られず、ニホンザルの攻撃行動は個体密度依存的に発生しているという結果を得た。</p> <p>また、この結果は、ニホンザルの飼育下個体の福祉を向上させる上で重要となるだろう。</p>	
	
図 1 観察はこのような調査区にて行った。	
<b>6. その他</b> (特記事項など)	